

自然環境のなかで育まれる子どもの成長

光松 佐和子、名古屋経済大学人間生活科学部教育保育学科

はじめに

現代の子どもは、様々なメディアが氾濫する情報にあふれた世界のなかで生活している。保育所、幼稚園や学校以外にも塾や習い事などで多忙であり、安全性が重視されるあまり、身体を動かす場所や外遊びの機会が減少し、自然と触れ合う場面も少なくなってきた。

従来、保育園や幼稚園での保育において、自然環境との関わりは幼児の発達を促す重要な要素であるという位置づけがなされてきた。幼稚園教育要領¹⁾では5領域の一つ「環境」について「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う」ことを目的としており、「幼児期において自然のもつ意味は大きく、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して、幼児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われることを踏まえ、幼児が自然とのかかわりを深めることができるよう工夫すること」を重視している。

同じく要領¹⁾の第1章総則第1幼稚園教育の基本において、「幼児期における教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼稚園教育は、学校教育法第22条に規定する目的を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする」と示されている。そして「幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、遊びを通しての指導を中心としてねらいが総合的に達成されるようにすることとある。」

保育所保育指針²⁾においても「身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心を持つ」ことをねらいとし、「自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く」や「身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。」などの内容がうたわれている。

子どもたちが、自分の人生を自分らしく生きるためには、自然の中で生活する体験が必要であり、自然の中でしか学べないことは計り知れないと考えられる。こうした背景から、多くの保育園や幼稚園では野菜や花などの植物栽培を保育に取り入れたり、園庭に砂場や花壇などを設置したりしており、子どもが自然を感じやすく、自然との触れ合いを促すための工夫がされている。

1 子どもが自然とかかわりを持つことの意味

筆者が担当する「環境指導法」の受講生に対し、「自然材を用いて遊ぶことは、子どもにとってどのような意味があるか」質問したところ、表1のような回答（自由記述）を得た。

受講生は短期大学部保育科所属の2年生で、4週間の教育実習を終えた6月に質問した。自由記述の回答を表1に示す。回答群を「自然を理解する」、「環境に対する意識、生命の大切さ」、「想像力、発想力、表現力、豊かな心」、「問題解決」、「自主性」、「コミュニケーション」、「健康」の7つに分類することができる。「自然を理解する」項目では、自然を味わい、四季を実感し、自然現象に対する知識を得、自然に対する理解につながる。「環境に対する意識」では、命の尊さを知り、畏敬の念を抱き、大切に守ろうとする気持ちが育まれる。また「野菜を自分で育てることで食育にもつながる」との回答もみられ、自分たちの生活と密接に結びつけて考えていることがわかる。「想像力、発想力、表現力、豊かな心」の項目では最も多くの記述があり、自然とかかわりを持つことで表現力や感覚が研ぎ澄まされ、豊かな発想力や豊かな心を持つことができると言える。また、自分で発見したものを自分で遊べることは子どもにとって嬉しいことであり、さらに、さまざまな工夫をしようとして遊びがステップアップするとの意見や、自然物を他の物に見立てたり変身させたりすることができるため、子どもが遊びこむことができ

るという意見も見られた。これらは発展的な遊びへつながっていくと思われる。「問題解決」の項目では、疑問を解決しようとする気持ちが生まれ、視野を広げることができ、「自主性」の項目では、使い方があらかじめ決まっている遊具とは異なり、探究心が芽生えることで、遊び方そのものを子ども自身が考えることによって遊びの幅が広がると答えた。「コミュニケーション」の項目では、自然の中で遊ぶことは子どもたちにとって鮮明な印象として残り、その体験を友達と共有できる点が挙げられ、さらに健康面でも丈夫な体を作ることが情緒の安定につながると回答している。

表1 自然材を用いた遊びの意味

自然を理解する	自然に親しむことができる 季節を味わうことができる 植物や小動物の名前を覚え、季節との関連について知識を得る 科学的事象の理解(水の蒸発、虹、雨、花の色、紅葉)色彩 その日の気温や湿度、天候を肌で感じる 自然の感触を知り、おもしろさを知る
環境に対する意識 生命の大切さ	自然のものでごみになるものはないと気付く 観察するだけでなく、自然を大切にしようという気持ちが生まれる(生き物の生命力) 生き物は人間と同じ命を持つ⇒大切にしようという気持ち(生命の尊厳)命の大切さ 自然の不思議さ⇒畏敬の念 自然に見守られる安心感 野菜を自分で育てることで愛着がわき、おいしく食べられるようになる⇒食育
想像力 発想力 表現力 豊かな心	想像をはるかにふくらませることができる 豊かな発想力、豊かな心を持つことができる 新しい発見がある 脳への刺激 表現力 感覚が研ぎ澄まされる 体に刺激を与える 自分で発見したものを自分で遊べることは子どもにとって嬉しいこと(発見する喜び) 五感を存分に使って遊べるアイデアがたくさんある 自然物を他の物に見立てたり変身させることができる⇒遊びの発展、遊びこむ力 身近なものを使って自己表現ができる
問題解決	疑問を解決しようとする気持ちが生まれる 扱い方が難しいからこそどうやったらうまくいくのか考えて学ぶ 周囲を観察、関心を持つようになる 視野が広がる
自主性	遊具とは異なり、遊び方を子ども自身が考える(自主性)遊びの幅が広がる 探究心が芽生える(好奇心⇒疑問)自ら学ぼうとする意欲
コミュニケーション	大人とのコミュニケーション 自然の中で遊ぶことは鮮明な印象として残り、その体験を友達と共有できる
健康	健康で丈夫な体、情緒の安定につながる 心身の成長

自然との関わりと言っても、興味の対象は子ども一人一人異なり、子どもたちの興味、関心に対して、自然は応答してくれる。満開の花を咲かせる桜、急に降り出す激しい雨、美しい虹、紅葉など、自然が発する膨大な情報を、子どもは五感で受け止め、水の蒸発、天候の変化、花の色や匂いの違いなど、身の回りの科学的事象について実体験を持って理解を深めるのである。

金山³⁾は「環境による保育」と「遊びを通しての総合的な指導」に着目し、公立保育園において保育内容指導法の検討を行った。収集した事例のうちの1つに「3歳児のジュース屋さんごっこ」がある。園の玄関や園庭で栽培しているプランターの草花は観賞用だけでなく、子どもが遊びに使用してもよい素材として捉えられており、「花を摘み過ぎて、きれいなお花が見られなくなってしまうように気を付けて使う」という約束がある。子どもたちは「お花さん、ちょっと花びらを使わせてね」などと声をかけながら花を摘む。近年では、空き地や原っぱなどで草花を摘んで遊ぶ機会を得られる子どもはごく少数であり、咲いている花を摘んで遊びに使うという経験のない子どもたちもいる。保育者や園が、身近な草花を用いて遊びの環境を設定すること、花を大切にしようとする思いやりの気持ちや、色や香りを楽しむ感性を育むことができる。

小谷⁴⁾は、同じく「遊びを通した総合的な指導」の場として、砂場が大きな意義をもつものであると報告している。砂や花びらを使って色水を作ることで、子どもは自然物とのかかわりを深め、花びらをすりつぶした色を観察し、匂いを嗅いだり五感を活用したり、保育者をお客に見立てアイスコーヒー屋になったり、ジュース屋になったりして、ごっこ遊びの掛け合いをしていたとのことである。一つの遊びの中で、子どもは様々な体験をし、心身の様々な側面の発達にとって必要な経験が相互に関連し合い、積み重ねられていくことがわかる。自然材を用いて遊びこむことは、科学性の芽生えや造形活動への意欲など様々な育ちにつながっている。

石倉⁵⁾は幼稚園における事例から自然とかかわる幼児の実態を探り、水、砂や土、草花や木、風、太陽の光、石、雪や氷など、幼児の遊び場面に見られる自然材が、幼児にどのような影響を与えるのか調査している。園庭には様々な自然材がある。子どもたちは、色や形、感触、匂いや音などを感じ、興味をもってかかわり、楽しさを味わっていく。虹やオーロラ、蜃気楼や雷、そして四季などの自然現象など、感性の育ちや表現の発想に与える影響が大きい。これらの科学的事象は、地球の引力や自転、公転などが関わっているものもあり、スケールの点で人間の力では及ばない表現である。このような自然とのかかわりの中で感じる力やイメージの世界をつくる力が蓄えられる。このようなかかわりを保育の現場で十分保障することが、子どもたちの感性を育むために必要である。

自然材を使って遊びを展開する時、人的環境としての保育者の役割はどのようなものであろうか。保育者は、子どもが自然の中にある様々な要素を意識でき、興味や関心を持つような環境を構成したり、子どもの遊びの様子から、次の遊びの展開を予測し、遊び道具を補足したりといった援助を行わなければならない。環境を通した教育においては、子どもが自ら対象とかかわることが大切であるため、保育者が一方的に主導したり指示したりするような直接的な関わりというより、間接的なかかわりが必要ではないかと考えられる。子どもが、使いたいものを使いたい時に使うことができるような配置がされることで、子どもがやりたいと思ったことを実現でき、遊びを通して様々なことを学ぶことができる。保育者は近くで子どもを見守り、遊びの中にあっても子どもからの働きかけに応え、仲間の一員となって遊ぶことが大切である。子ども同士の関わり合いが多くなるような環境を構成することで、子どもの自発的な遊びを促し、人間関係が構築される機会が増えるのではないかと考える。

2 保育者をめざす学生の実験

子どもの自然との関わりを援助するためには、まず保育者自身が、動植物の飼育・栽培の経験など自然体験を十分に持っていなければ、それらを有効に実施することは難しい。

細田ら⁶⁾は保育職を目指す短大生の自然環境に関する意識調査を行った結果、自然環境に触れたり、そこでの遊びを経験してきている学生は「多いとはいえない」ことを見出し、教育内容として自然物を身近に感じやすい植物栽培を取り入れ、「育てる」経験をさせる必要性を述べている。

また井上⁷⁾は、若者の自然体験不足や理科離れが高等教育機関にも及んでおり、若い保育者や保育者を志望する学生に生活体験や自然体験が不十分なために「保育者を志望する学生の実態と自然とのかかわりを援助できる保育者像には隔たりがあると考えられ、保育者養成にはその間隙を埋める教育が従来よりも求められている」と指摘している。この井上の調査によれば、保育者養成の短期大学149校のうち「自然」に関する内容は「領域環境」を中心にほとんどの養成校の教育において行われていたが、実体験を導入していたのは6割程度であった。学生の体験不足を補うためには講義ではなく「体験的な授業」が必要だとし、飼育栽培実習や植物遊び体験、野外の動植物の観察、五感を使った身近な自然体験等の導入を提案している。

草野ら⁸⁾は、大学での保育者養成課程における自然体験授業が学生に与える影響について、野菜栽培実践を中心とした授業体験を通し、検討を行った。その結果、授業で自然体験の機会を設けることが有益であり、野菜栽培については、約7割が以前に保育園・幼稚園や小学校、家庭などで栽培体験をもっていたが、それらは低年齢での部分的体験であり主体的に関わるといったものではなかったため、授業での体系的な体験が意識の変化により大きく作用したと述べている。野菜の成長過程について知ることですーパーで売っている野菜が畑でなっている姿が想像できるようになり、体験による知識の獲得の効果が見られた。また意識においても「野菜など植物の栽培は面白い、楽しい」、「野菜栽培を自分でやってみたいと思う」、「畑でとれたての野菜を食べたいと思う」、「料理に関心がある」、「自然環境に関心がある」などの感想が述べられた。野菜など植物栽培は幼稚園や保育園での保育に役立つが、知識だけでなく、自らの実体験に基づいて確信をもって言えることが大切である。

以上のことから、保育内容「環境」において子どもと自然との関わりをよりよく促すために、保育者自身が自然体験を豊富に持つことが重要であり、そのためには保育者をめざす学生の養成課程において、学生が自然体験を積むことのできる授業を導入する必要があると言える。

野菜栽培を実際に体験することで、五感を通じて自然の生命力や脅威や不思議さ、農作業の苦勞と達成感や協働の喜び、人間が自然に関わることの意味を掴み取ることができる。

3 自然環境と教育

子どもたちを取り巻く社会環境に目を向けると、世界的緊急課題である環境問題が挙げられる。

人間が経済活動を優先するあまり、地球環境の汚染や悪化が進行し、環境が破壊されていく現状がある。

UNESCOが推進するESD；
educational for sustainable development（持続可能な開発のための教育）の取り組みにおいて、環境保護や人権など地球規模の課題解決に向けて行動する人材が各地で育成されている。世界には環境破壊、人権侵害、紛争、貧困などの課題が山積みになっているが、この状況を打開するには教育の力が必要である。

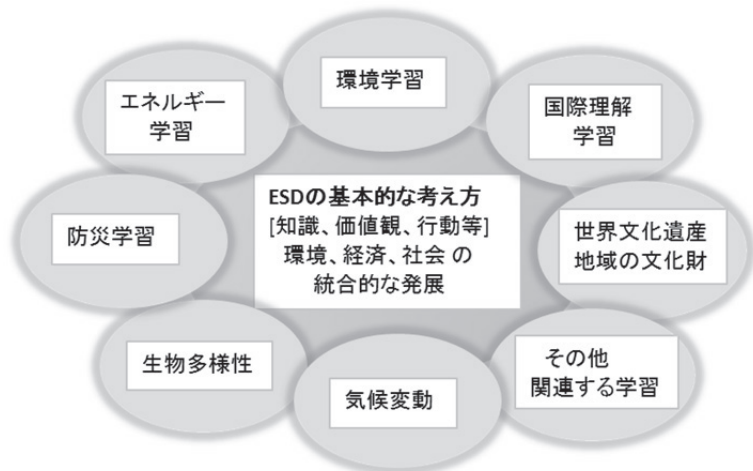


図1 ESDの基本的な考え方

ESDの基本的な考え方⁹⁾について図1に示す。

環境学習、生物多様性、エネルギー学習だけでなく、国際理解学習や世界文化遺産などに関する学習も含まれている。地球的課題を自らの課題として捉え、「まず身近にできることから取り組もう」とする価値観を持って行動できる子どもを育てることが持続可能な未来を作ることにつながる。

持続可能な社会の構築には「環境」「経済」「社会」の3つのバランスを取りながら発展することが必要であるが、ESDの中身は気候変動、生物多様性、エネルギー、国際理解、防災など多岐にわたる学習である。自律の精神、判断力、責任感を育み、他者・社会・自然環境との関係性を知り、「つながり」を尊重する態度の育成を目指すことが重要である。このESDの理念は非常に大切で教育の本質と言えるが、すべてを理解するには時間がかかるので、子どもが興味を持てる一つのテーマを掘り下げて学ぶことができるよう、指導方法を考えることが肝心である。

国立教育政策研究所 教育課程研究センターの「環境教育 指導資料 [幼稚園・小学校編]」⁹⁾によると、東日本大震災の後、国連持続可能な開発会議(リオ+20)が開催され、環境教育やESDの意義を改めて見つめ直す必要性が出てきているとのことである。環境教育は、様々な世界情勢を踏まえながら、時代を超えてグローバルに広がりつつある。その取り組みは自然環境や生活環境といった観点で地域によって異なるため、地域の特性など身近な問題に目を向けた学習内容を立案し、身近な活動から始めることが望ましいと考えられる。その上で、身近な環境問題が地球環境問題につながっているということ子どもたちに認識してもらい、地球環境に配慮した態度や行動力を育てていくことが大切である。

幼稚園や保育所でESDを念頭に置いた教育を推進するために、例えば、「園の近くを流れる川をきれいにするにはどうすればよいか」や「きれいな星空を見るためにはどうすればよいか」というテーマについて、子どもたちと一緒に調べ、まとめ、考える活動が挙げられる。その場ですぐに自分の意見を言う子どももいるであろうし、家に帰って保護者に相談したり、自分で調べたりする子どももいるはずである。ESDのテーマは正解が一つとは限らないので様々な発言をうながし、他の子どもの意見も聞きながら、子ども同士の意見交換が活発になる。子ども自らが主体的に学び、何かをつかみ取っていく学びだからこそ価値観や行動を変えていくことができる。ESDの基本は、地球規模で問題を捉えることにあるが、行動は身近なところから起こすことが特徴的である。地球規模の問題は自分が動いたところで劇的に変わるものではないが、自分が住んでいる地域、身近な問題は自分の行動で変えることができるかもしれない。身近な地域であれば、子どもたちが何度も繰り返し、関わるができる。「園の近くを流れる川をきれいにするにはどうすればよいか」という課題に対しては、実際にその川を何回でも見に行き確かめることができる。そして、自分の働きかけによって、変化が起きれば大きな自信につながるため、非常に教育効果が高いと言える。

テーマが壮大ですぐに効果や結論が得られる性質のものではないため、ESDにおいては特に教育課程の接続がスムーズに進行するよう、幼稚園教育から小学校教育へ学校種間の連携、学びのつながりが重要である。そして教育の対象は子どもたちだけでなく、野菜の栽培と同じように保育者にも持続可能な世界を実現するための高い意識が望まれる。

さらに、ESDについて考える際、家庭との連携が非常に大切である。「水を大切に使うことが必要」とか「エアコンの使い過ぎをやめよう」という知識を子どもたちに伝えることも大切であるが、頭で理解する以上に、自分の心で「美しい自然を守りたい」「多様性豊かな社会にしたい」と感じられることが大切である。人は心で感じないと行動できない生き物である。家庭では「子どもの感性を豊かにすること」を意識し、美しい自然や文化に触れたり、異なる国の人と交流する機会を積極的に持つようにする。心が揺り動かされる体験は深い学びになり、行動へとつながる豊かな感性を磨く体験を積み重ねること自体が、持続可能な社会づくりの基盤になる。

ロバート・フルガム¹⁰⁾は、「人はどう生きるか、どのようにふるまい、どんな気持ちで日々を送れば

よいか、本当に知っていなくてはならないことを、私は全部残らず人生に必要なことを幼稚園の砂場で教わった」と述べ、幼児期の環境の重要性について語っている。

おびたしい情報に囲まれる生活を余儀なくされている時代だからこそ、バーチャルな世界に満足するのではなく、時間をかけて実際に足を運び、五感を使って実物に触れ、視野を広げて得た正確な情報が大切である。ステレオタイプな簡便でわかりやすい表現に惑わされず、直接的な触れ合いの中で得られる感動が人を成長させるのではないかと考える。

幼稚園教育要領¹⁾に「忍耐力や自己制御、自尊心といった社会情動的スキルやいわゆる非認知的能力を幼児期に身に付けることが大人になってからの生活に大きな差を生じさせる」とある。目標に向かって頑張る力、人とうまく関わる力、感情のコントロール力などが非認知的能力と言われているが、これらは子どもたちが豊かな実体験を通して体得するものである。同じく教育要領²⁾には「幼稚園には、学校教育の始まりとして、一人一人の幼児が、将来、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにするための基礎を培うことが求められている」とある。幼児期における自然との関わりは、体験活動を通して心身の発達に寄与し、生物の多様性を知ることによって子どもの科学的探究心を呼び起こし、自然環境の保全に寄与する態度の育成につながることを保育者養成校の教員として再確認し、保育職を目指す学生の指導に役立てたいと考える。

参考文献

1. 文部科学省, 幼稚園教育要領, 2017
2. 厚生労働省, 保育所保育指針, 2017
3. 金山美和子, 保育内容指導演法の検討—「環境による保育」と「遊びを通しての総合的な指導に着目して—, 長野県短期大学紀要, 第71号, pp89-95, 2016
4. 小谷宜路, 幼児教育における「砂場」の教育的意義に関する研究—幼児の育ちをとらえる視点と環境を構成する視点—, 埼玉大学教育学部附属教育実践房合センター紀要, 12号, pp52, 2013
5. 石倉卓子, 保育内容の指導に関する一考察—自然とかかわる保育環境を通して—, 富山短期大学紀要, 第43巻, 9, 2008
6. 細田成子, 西島大祐, 山根一晃, 田川悦子, 保育職を目指す学生の自然環境に関する意識調査, 日本教育心理学会総会発表論文集(50), pp126, 2008
7. 井上美智子, 保育者養成系短期大学における自然とかかわる教育内容: 実施実態と課題, 子ども環境学研究4, (2), pp54-59, 2008
8. 草野いづみ, 大学での保育者養成における自然体験授業の効果—保育内容の指導演法「環境」の野菜栽培の実践から—, 帝京大学文学部教育学科紀要, 36, pp71-78, 2011
9. 国立教育政策研究所 教育課程研究センター, 環境教育 指導演料 [幼稚園・小学校編], 2014
10. ロバート・フルガム, 池央耿訳, 人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ, 河出書房新社, 1990